

# 奈良・酒船石遺跡

さかふねいし

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村岡
- 2 調査期間 第一四次調査 二〇〇〇年(平12) 六月～一月
- 3 発掘機関 明日香村教育委員会
- 4 調査担当者 相原嘉之
- 5 遺跡の種類 宮殿関連遺跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(吉野山)

酒船石遺跡は飛鳥の小盆地の東、「酒船石」がある丘陵に位置する。一九九二年に丘陵の北斜面で大規模な土地造成痕跡と石垣遺構が発見され、「日本書紀」斉明二年(六五六)是歳条に「宮の東の山に石を累ねて垣とす」(岩波日本古典文学大系本による)と記されるものにあたりと考えられた。二〇〇〇年には丘陵北裾の谷底から、亀形石造物などの導水施設や石敷・石

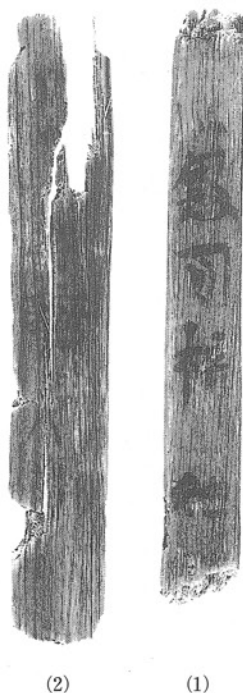
垣が発見された(第二・一三次調査)。

今回の調査は第二二次調査地の北側の様相を解明するためのもので、調査面積は約一二〇〇㎡。調査の結果、亀形石造物の尾から延びる石組溝がさらに北へと続くこと、その両側には石段があることが判明した。また、南北溝の西側でこれらの石段よりも古い石段を確認し、遺構の重複関係も推定できるようになった。その結果、この地域では七世紀中頃～一〇世紀初頭までを五時期に区分することが可能となり、Ⅰ期は七世紀中頃、Ⅱ期は七世紀後半、Ⅲ期は七世紀後半～末、Ⅳ期は九世紀後半、Ⅴ期は一〇世紀初頭と考えられる。

木簡は、幅一・六mのⅢ期の南北石組溝SD一一B東肩の裏込め土から、木屑とともに出土した。木簡と共存する遺物は極めて少なく、時期を決定し難いが、Ⅰ期を埋める整地土からは飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器が出土すること、石組溝埋土からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土していることから、木簡の帰属する年代は飛鳥Ⅱ～Ⅳ(七世紀中頃から後半)の間と推定される。

## 8 木簡の釈文・内容

- (1) ☐☐☐椅 神 ☐ (149)×18×(10) 081
- (2) ☐☐☐ 薦二尺四寸 154×23×3 032
- (3) ☐☐☐ 120×(13)×4 032



(4)



(171)×(21)×3 081

(1)は、上端・下端ともに折損。左右両側面は原形をとどめる。裏面は裂けている。一字目も下端から上に向かって削られ、削り残りの状態である。三文字目の門構えはカギ状に書する字体か。六文字目は門構えの残画と思われる墨痕がある。歴名簡の一部か。(2)は、上端が一部欠損するが、四周原形をとどめる。二文字目と三文字目の間は欠損、もとは文字があつた可能性もある。四文字目「薦」の字体は「薦」である。二尺四寸の薦に付けた荷札か保管用の付札であろう。(3)は、左側面割れ。(4)は、上端および右側面は原形をとどめる。下端は折損、左側面は割れ。下端部に墨痕が確認できる。

#### 9 関係文献

明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報 平成一二年度』(二〇〇二年刊行予定)

(1)7・9 相原嘉之、8 山下信一郎(奈良文化財研究所)

奈良国立文化財研究所

#### 『平城京木簡二―長屋王家木簡二』の刊行

長屋王家木簡の正式報告書の第二冊目、『平城京木簡二―長屋王家木簡二』(奈良国立文化財研究所史料第五三冊)が刊行された。本書はいわゆる木簡溝のうち、TC―一地区という最も木簡の出土が濃密な地域を対象とし、二八〇〇点の木簡を収録している。『平城京木簡二』同様に、高精細印刷を駆使して原寸大の写真により報告している。さらに一部の木簡については、高解像度の赤外線デジタル画像データも併せて掲載した。

本報告書作成過程で判明した接続もあり、釈文もより正確を期している。B4判・本文二〇六頁、別冊解説・A5判五二六頁。

なお、発売は吉川弘文館から。頒価は四七〇〇円(税別)。